

指導目標、指導計画、授業時数などの教育課程の編成・実施状況	観点別学習状況の評価及び評定（学習指導要領に対応して）	児童による授業評価の結果の反映	体験的な学習や問題解決的な学習、児童の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習状況	個に応じた指導の充実状況	授業や教材開発における外部人材、地域の自然や文化財、伝統行事などの教育資源の活用状況	研究・みらい科に関わる内容について
3.6	3.5	3.1	3.7	3.1	3.5	3.8

○これだけ大変な日程の中、動きやすいよう計画できていた。

▲やはり会議が長引きがち

▲会議の時間短縮に向けた努力は行っているが、時間短縮だけに意識がとられて質の高い会議を目指すべきだったと反省している。若手教員や異動されたばかりの職員もいることもふまえると、スリム化だけでなく、誰もが分かる内容の資料づくりや参加できる会議にするという意識をもつ必要があると感じた。

←事前提案の徹底、運営会議の内容再検討

←資料は事前に配布（タブレット）し、会議の中で質問を受け付ける。

▲児童による授業の評価の実施方法や結果確認については周知が不足しているように思う。

★教育計画の読み合わせや経営・運営方針を年度初め、学期始めに行うべき。

★手順や評価の基準などがどこに明記されているか、年度初めに伝達するとよい。

○読書活動が充実していてよい。特に読書月間は、本に触れられる機会も多く、児童も読書に親しめたように感じた。

▲みらい科の時数計算が難しかった。複数の科目を横断して学習するのは良かったが、時数の計算をこまめにしておく必要がある。

○みらい科を通して身に付けた、体験的な学習や問題解決力、興味・関心を生かした自主的、自発的な学習を他の場面でも積極的に取り組めたとする。

←（おちろく班での活動の機会を増やすために DASH のない金曜日におちろく班遊びを入れている。）おちろく班遊びの回数を減らさないことを重視するのであれば、掃除が減ってしまうが、火曜日や木曜日におちろく班遊びを入れて行事の週や前週にはおちろく班遊びを入れないことも検討する。特活部、生活指導部とも相談する。体育集会や児童集会についてはできるだけ行事の前を避けるようにする。

▲若手教諭への OJT の時間の確保が必要

★次年度研究内容を、現場が必要感を感じているものにしていく。

○他教科同士のつながりを意識して授業に取り組むことができるきっかけになった。

▲研究中心の授業構成や時間割になり、いろいろ調整する必要があった。

▲教員の負担が大きい

○特に研究に携わる先生たちが、夜遅くまで真剣に研究(みらい科)について話し合っている姿は素晴らしい。

★研究は一つの教科に集中してやったほうがよいと思った。

○おちろく班の活動を通して異学年と活動していることで、高学年にリーダー性が身についていた。

○6年生を中心に子どもたちが自主的に活動する姿が多く見られる。

★いまの仕組みのままでは、間延びしたり、発達段階の違いによる差が強く出すぎたりするように感じた。

成果と課題

○成果 ▲課題

★研究内容について

○「みらい科」の定義を話し合い、コンバイン型プログラムの単元を他教科や系統などとかかわらせながら構成できた。

○研究授業では、テーマに沿ったしかけづくりをブロックで検討し、取り組むことができた。その姿勢で今後もこのテーマを意識して取り組んでいきたい。

▲コンバイン型プログラムの作成などは行えたが、単元の流れや組み立てなどを含め、子どもたちが目的や思いをもって取り組む活動になっているかは疑問がある。教育計画や研究の軸・枠、教員の教育観の見直しもより一層改善していく必要がある。

▲全学年で、コンバイン型プログラムを作成し実行したが、入学したての1年生などには難しいプログラムだと感じた。まずは生活科などの教科学習をきちんと実施して学びを定着させたい。

★自ら活動に取り組む（主体的に学習に取り組む態度）分科会

○自分たちの課題から行動につながったので、クラスの状況等を理解した上で話し合いを進めることができた。そのため、お互いに自分ができることを精一杯取り組むという点においては共有しながら学習を進めた。

▲教員の手立てが手厚すぎることで、自ら活動に取り組む前に、活動がほぼ決まってしまうこともあった。指示・発問の仕方、ワークシートの内容、提示物や掲示するタイミングなど引き続き研究する必要がある。

▲生活の中で必要となる内容をもっと意識して取り入れ、課題を身近に感じさせるとともに、学習の必要感を感じ取らせる活動が必要。答えが一つではない「問い」の用意、学習形態や学習方法の選択肢を示す、失敗後その原因について考え再挑戦できる場を設定するなど、意識していきたい。

★（自分で）考え判断する（思考力・判断力・表現力）分科会

○低学年 DASH の活動での 2 年生の姿を見て、1 年生が「なるほど」「こうやるのか」という学びを得られていると感じた。以前は 6 年生に「お世話されている」感があったので、近い学年同士の縦割りのかわりには成長を促していると思う。

○タブレット端末で自分の姿を録画したり、追っかけ再生を見られるようにしたりして、自分の動きを可視化できるようにした。そうすることで、次の課題は何か自分で判断しながら活動する姿が見られた。

○低学年の友達との関わり合いや中学年の付箋の活用など、ものや人との関わりの中で思考の動機づけが行われたり、深められたりすることがよく分かった。今後とも、どのような仕掛けが有効なのかを検討し、最適な方法で指導に当たることで思考力・判断力を養いたい。

▲考え判断する中で新しい価値に気付くことができている様子は随所に見られるのだが、根拠はない。数値化しにくい項目をどう見ていけばよいのか探していきたい。

●（自分らしく）行動（表現）する（個別の知識・技能）分科会

○定期的に分科会を行い、「（自分らしく）行動（表現）する」ということを、どのように捉えるのか、共通理解をもつことができた。また、低→中→高と系統立てて考えることができたので、同じ視点で考えることができた。

○2 年生の研究授業では、共に活動しながら、友達の良さを認め合ったり、自分の得意なことを生かして、友達に喜んでもらえたり、低学年の「行動・表現の姿」が、様々な活動場面から見ることはできた。「できた」とか、「友達と喜び合えた」という達成感や経験が、また次の活動に積極的に取り組めるようになると思う。

○外部企業との共同授業（グラフィックレコーディング）を行ったことで、表現の手段が増えたように感じる。そのおかげで、自分に合った表現方法（文章・絵・パワポなど）に気付いた子もいた。

○教科学習の中で身に付けた技能や知識が基盤となって、みらい科を形づくっていると感じる。

▲経験が少ない分、低学年は、やってみたいと思えるテーマ枠を教師側が用意したり、子どもたちの考えが出やすくなるような投げかけをしたりすることが必要だと感じた。

▲自分の気持ちを表現することがまだまだ苦手な子も多く見られる。

▲自由度をどれ位高めるか、どこにゴールをもってくるかなど、子どもたちの様子と教師の判断によるので、毎年同じカリキュラム、毎年同じテーマにするのは難しい。